

異言語で敗北を引き受ける

——金石範からムールード・マムリへ——

鵜戸 聡

はじめに

1978年に邦訳されたアルジェリアの小説『阿片と鞭』（原著65年）の巻末には、訳者菊池章一の解説に加え、金石範（1925-）の小論「裏切者タイエブのことなど」が付されている。「原住民作家」の第一世代に属するムールード・マムリ（1917-1989）と「在日朝鮮人文学」を主導して来た日本語作家を繋ぐものはいったい何だったのだろうか。この一冊の翻訳を手がかりにして、アルジェリア仏語文学¹⁾という植民地支配に由来するもう一つの異言語文学に分け入り、我々が生きている「ことば」のアイデンティティについて考えてみたい。

翻訳の背景

北アフリカを描いた文学作品が日本語に移されるのは、まずもって「西洋文学」の翻訳においてである。戦前からよく読まれたアンドレ・ジッドの作品にアルジェリアを舞台とした『背徳者』（原著1902、邦訳1921年）があり、1955年に新潮社から刊行された「新鋭海外文学叢書」には、植民地アルジェリアのフランス人作家ジュール・ロワの『幸福の谷間』（金子博訳、原著は1946年アルジェ刊、ルノー賞受賞）、モロッコに住み着いたアメリカ人ポール・ボウルズによる『極地の空』[シュルタリング・スカイ]（大久保康雄訳、原著1949年）、そしてジッド同様に北アフリカを旅したモンテルランの『沙漠のバラの戀物語』（堀口大學訳、仏語完全版は1968年、邦訳完全版は1977年）が収められている。さらに、アルジェリア出身のエマニュエル・ロブレスの『イヴはこゝにいる』（品田一良訳）も同じ新潮社から56年に邦訳が出ており、57年には「フランス文壇の、いわばそうそうたる中堅作家」²⁾として第29回国際ペン大会の折に来日している。彼の場合はルイス・ブニエルの映画『それを暁と呼ぶ』（1956）の原作者と言った方が通りが良いかもしれない。

さて、このような欧米志向から外れてアラブ＝ベルベル文学の翻訳紹介がなされるのはようやく70年代になってからであり、その魁として作家の野間宏が編者となって公刊した二種のアラブ文学選集が挙げられる。すなわち1974年に創樹社から出された一巻本の『現代アラブ文学選』と、78年に河出書房新社から出された全十巻からなる「現代アラブ小説全集」（アラブ史家の前嶋信次との共編）である。特に後者はアラブ小説の翻訳紹介としては空前絶後の規模とってよい。

『現代アラブ文学選』はその先駆性のみならず、広く小説・戯曲・詩・評論を収載して総合的に現代アラブ文学を紹介しようとした点でも野心的な選集であったが、今も昔もアラブ文学を

専攻する研究者は非常に限られており、作品の収集・選定に多大な困難があったことは想像に難くない。野間の序文と竹内の解説、それに巻末の「初出一覧」を眺めてみると、徴されたテキストの多くはどうかや国際アジア＝アフリカ作家会議（Afro-Asian Writers' Association）発行の文芸誌『ロータス』（*Lotus*）から選抜されたものようである。

1955年に第一回アジア＝アフリカ会議がバンドンで開かれ、アジア＝アフリカ主義や第三世界主義が国際的に高揚するなか、文学者の運動によって1958年に創設された国際アジア＝アフリカ作家会議は、58年タシセント大会、61年東京緊急大会、67年ベイルート大会、70年ニューデリー大会といった一連の国際会議を開催するほか、68年には英仏アラビア語で機関誌『ロータス』を創刊し、第三世界の新しい文学の紹介に努めていた。日本からの参加者に加藤周一、堀田善衛、竹内泰宏、野間宏、島尾敏雄、大江健三郎、中藺英助、高良留美子らがあり、野間がアラブ文学の紹介に携わることになったのもこの文脈に拠る³⁾。

「現代アラブ小説全集」の方は、全十巻中五巻までがエジプト小説だが（フセイン、ハキーム、シャルカーウィー、マフフーズ）、後半はレバノンのバラカート、パレスチナのカナファーニー、スーダンのサーレフ、アルジェリアのディブとマムリの作品が収められている。1988年にノーベル文学賞を受賞するマフフーズの著『バイナル・カスライン』（二巻本）は仏・英訳より10年早く訳されていることから、この「全集」がいかにか先駆的であったかが推し量られよう。ここにムールード・マムリが加えられているのは、彼自身が国際アジア＝アフリカ作家会議におけるアルジェリア代表であり、74年には日本アラブ文化連帯会議に出席するため来日していることも関係しているだろう。彼の『阿片と鞭』についても書評が『ロータス』に掲載されている⁴⁾。ディブはその短篇『呪文』がすでに『現代アラブ文学選』に載っており（初出は『ロータス』68年夏号）、『全集』に採られた長篇『アフリカの夏』（『阿片と鞭』の書評でも言及あり）とともにアルジェリア戦争を描いたものである。

このアルジェリア戦争（1954-62）というもう一つの文脈においては、多くのドキュメントが同時代の日本にもたらされている。翻訳の主な担い手は当時フランスに留学していた若い仏文学者たちなのだが、フランス研究との関わりではレジスタンスの問題を考慮する必要がある。終戦直後から加藤周一らによるヴェルコールなどの抵抗文学が紹介され、フランスの「英雄的」レジスタンスが半ば伝説的に左派知識人たちに受容されてきた。それだからこそ1950-53年にフランス留学を経験した遠藤周作などは、レジスタンスによる同じフランス人に対する拷問・虐殺を知って衝撃を受け、この事件の調査を試みている。「日本にいた時、ぼくは華々しいヒューマニズムと反ファシズムの闘争と讃えられたその運動の裏面に同胞相殺戮する凄惨な悲劇がかくされていたとは夢にも知りませんでした」と彼は言う⁵⁾。しかも、1954年にアルジェリア戦争が勃発するや、かつての対独レジスタンスは「死刑執行人」に変貌し、アルジェリアでは虐殺と拷問が横行することになる。

しかしその一方で、「抵抗運動」をアルジェリア側に立って継続する団体もあった。ナチ占領期に地下出版社として発足した「深夜叢書出版社」（Les Editions de Minuit）やカトリック左派による『キリスト者の証言』誌、「精神的抵抗委員会」などがあり、アルジェリアを支持した左翼系雑誌には『フランス・オブセルヴァトゥール』、『レ・タン・モデルヌ』（サルトル）、『エス

プリ』（人民戦線系）、『ユマニテ』（共産党）がある。フランス市民による組織的な対アルジェリア協力としてはいわゆる「ジャンソン機関」が有名だろう。当時の日本人留学生たちがアルジェリア戦争を「発見」し、左派思想や「記録文学」を紹介・翻訳したもののなかには以下のようなものがある。

深夜叢書出版社（ミニユイ社）の刊行物に、アンリ・アレグ『尋問』（長谷川四郎訳、みすず書房、1958年。サルトルの論考を付す）、モリアンス『祖国に反逆する：アルジェリア革命とフランス青年』（淡徳三郎編訳、三一新書、1960年）⁶⁾があり、カトリック左派系の刊行物を編集したものに、ジャン・ミュレル他『太陽の影：アルジェリア出征兵士の手記』（鈴木道彦・二宮敬・小林善彦訳、青木書店、1958年）⁷⁾がある。また、植民者左派の手になるものとしてジュール・ロワ『アルジェリア戦争：私は証言する』（鈴木道彦訳、岩波新書、1961年〔原著60年〕）があり、独立直後の隣国チュニジアのユダヤ人アルベール・メンミによる『植民地：その心理的風土』（渡辺淳訳、三一新書、1959年）もこの文脈で翻訳紹介されている。いずれの翻訳にも詳細な訳者解題が付されており、日仏の知識人たちの関心が、拷問、脱走、良心的徴兵拒否などにあったことが読み取れる。とりわけ、プルーストの個人全訳などの不朽の業績を持ち、海老原武とともにフランツ・ファノンの翻訳者としても知られている鈴木道彦は、かつて「アルジェリアは遠くない」と述べ（『東京女子大学生新聞』1961/11/30）、「民族責任」という理念を掲げて、後に金嬉老事件などの在日問題やベトナム戦争に積極的に関わっていく⁸⁾。なお、1958年にはFLN（国民解放戦線）が極東代表部を東京に設置、61年には日本北アフリカ協会が設立され、独立戦争の支援と両国の交流が図られた。

興味深いことに、アメリカ軍政下の沖縄からの反応もあった。いれい・たかし（伊礼孝）は『琉大文学』（二巻八号、59年）に「『壊疽』の部分を設定し、撃て」と題した論説を発表。「ぼくたちの内部にアルジェリアを設定し〔中略〕、それを拡大すること以外に、現代の（基地の中のぼくたちの）詩活動はない」と論じ、「支配者の肉体を機能停止させるための『壊疽』の菌を大いに生産し、放つことにより、沖縄における詩運動の新しい出発としたい」と主張した。現在に至るまで、沖縄の主体化をめぐる議論がしばしばファノンの影響下にあることを考えると、アルジェリア戦争の提起した問題はいまだ尾を曳いていると言えよう。

阿片と鞭

上述の文脈からしてみると、「第三世界の雄」たるアルジェリアの「革命」を扱った小説として、『阿片と鞭』が邦訳されたのも当然に思われる。しかし、作品の内容はおおよそ独立の高揚に浸ったものではない。まずはごく簡単に粗筋を紹介しよう。

フランスで教育を受けたバシール・ラズラクは、フランス人女性クロードを恋人に持つ西欧化した医師であり、いわゆる植民地の「開化民」（*évolué*）である。アルジェリア戦争が泥沼化するなか、彼は幼なじみのマルクス主義者ラムダンに革命への参加を強く促されるが、どちらの陣営にも確信が持てず逡巡したままである。ある晩、アレズキと名乗る青年が訪ねて来て「ムスリムの医者が必要」だと訴えるが、バシールは「フェッラーガ」（叛徒：アルジェリア人レジスタンスに対する呼称）を助けて累が及ぶことを恐れ往診を断る。しかし、諦めて辞去したア

レズキが近くの検問で連行されるのを見たバシールは、拷問された彼の口から共犯として自分の名が漏れることを案じ、翌朝、夜間外出禁止が解けるや故郷のカビリー（先住民ベルベル人の一派カビール人が住む地域）の村「タラ＝ウズルー」に向かう。

実家には母親と、若くして寡婦となった姉ファッルージャが残っていたが、バシールはタラがまったく変わってしまったことに驚く。末弟のアリがフェッラーガとなって抵抗運動に身を投じる一方、家族を捨てた長兄のベライドは、食料がすべて配給となって皆が飢えるなか、駐屯するフランス軍に協力して甘い汁を吸っている。また、村人からフランス軍との連絡役に差し出されたタイエブは、村のつまはじきものから植民地権力の代行者へと身を変じ、人々を恐怖で支配するようになっていた。

ある日ベライドは、アルジェでラムダンが逮捕されるとバシールに告げ、フェッラーガのもとに逃亡するよう指示する。軍医となったバシールは負傷し、モロッコでの療養を命じられるが、立ち寄ったアルジェの自宅で逮捕尋問される。追いつめられながらも証拠不十分で釈放されるとモロッコに逃れ、現地のベルベル人の娘イトと車で旅をする。やがてバシールはタラへと戻るが、フェッラーガたちは司令官アミルーシュを失って壊滅し、フランス軍による残党狩りによって村中が尋問され、最後にはタラの村が砲弾で破壊される。

この他にも、ベライドやアリ、ファッルージャらの様々なエピソードが絡み合いつつ物語は展開するのだが、観念的な対話が繰り返される点に特徴的があり、思想性の強いリアリズム小説となっている。

さて、冒頭に述べたように、この小説を読んだ金石範は「裏切者タイエブのことなど」という一文を草しているのだが、就中この悲劇的な結末に注意を向けている。

この小説の終わりのシーンはかなり悲劇的であって、それだけを見る限りにおいては、必ずしもF・L・N（民族解放戦線）が勝利し、アルジェリアが独立を達成するという確固たる展望はたたない。却って、マキの指導者アミルーシュの死につながる解放軍の壊滅の状態が描かれ、フランス軍の勝利が自ずと前面に出てきているといった印象さえ受ける。

つまり作者は民族の独立という現実の勝利の側に身を置きながら、その小説では勝利そのものを描かなかったとすることができるだろう。小説の終わりがまだ現実の勝利からほど遠いところに置かれているところに、私はこの小説の持っている一つのモチーフを感じた。それが最後の場面に現れているように思える。

ところで、なぜ、「阿片と鞭」の最後がああでなければならないのか？

私は最後の場面で、被植民地人として人生を生きる人間について考え込んでしまった。あの最後のシーンは苦しい。ことばをもって小説の世界に描かれながら”現実言葉はこんなにも遥かに超えていた”（最後のバシールの独白）、その人生の現実そのものについて考え込んでしまったのである。[中略]

濟州島の民衆はかつての四・三事件を思い出すことを怖れる。人々が意識的に記憶の風化を促進させ、そして社会的にタブーであることとも相俟って、いまや四・三事件は歴史の片隅のごみ箱のなかに埋もれてしまった。つまりわれわれはいまでも歴史的なその敗北

の現実を前提にしながら、その敗北の状況を書かなければならないということである。〔中略〕

ところで原作はフランス語で書かれているという。この一文はもちろん日本語の翻訳を読んでからの感想だが、それにしても作者ママリの苦衷が想像できるような気がする。

というのは、たとえば作品の場面を限って見ることにしても、最後の無人の村でのタイエブとモハンドの会話、またはタサデイトとの会話など、そして、タイエブの慟哭する心の激しい動きと独白が、彼らのことばであるベルベル語で書かれられないということのもどかしさはどうしようもないものだろう。

この二つのことばの関係は私には想像がつかない。しかしことばは違うにしても、二重言語的な状況にあるのは私も同様である。私が濟州島の方言を標準語に近い日本語で書いて行くことのもどかしさは、私がよく口にしている“ことばの普遍性”だけでは片付けられないものがある。

これらの点は、菊池氏の解説にもちょっと触れられている通り、在日朝鮮人作家たちの苦衷にも通ずるものがあるといえるだろう。⁹⁾

「戦勝」に沸く独立直後のアルジェリアにありながら、このような「悲劇」を描いたママリの眼はいかにも冷徹である。もともと古典語の教師だった彼はギリシア悲劇からも少なからぬ影響を受けており、「運命」に翻弄されるかのように、登場人物たちはみな「挫折」に徴づけられている。この物語はタラの崩壊で終わるものの、末尾には二頁にも満たないバシールの独白が付けられており、三人称で語られて来た小説はここに至って一人称に語りを転ずる。

私はいま、クロードとイトへの手紙を書き終わったところだ。出来れば、ラムダンにも、ユベールにも、レホにも、タサデイトにも、ぶんぶん〔あだ名〕にも、書きたいと思う……過去は清算しなければならない。それは、過去を否認することではない。それは卑劣というものだろう。それに、かつてあったことに驚くような、それぞれの姿や瞬間にむかって、《これはいったい誰だ？ 俺はすっかり手を洗ったんだ》と言うだけですむならば、それは容易にすぎるだろう。むしろ私は、激しい勢いで、〔ノスタルジックな優しさで、〕それらを引き受けるだろう。なぜなら、それらは取換えることの出来ない私であり、新しく発見した私の生への志向が生まれたのは、それらの抜け殻からなのであり、さらにまた、それらのおかげで、私は幻想や模造品や見せかけに対して免疫になったのである。私はもう、ダイヤモンドのかわりに、硝子細工をとろうとは思わない。真実！ それでなければ、私はもう満足できない。魔法にかけることも、縛ることもしない……阿片でも鞭でもない、真実！〔中略〕

この手紙を書き終えて、私は、イトがこれを読まないで、代書人に訳させるだろう、と考えた。私はいわれない冒瀆を好まない。むしろ私は、このことを、そしてもっと他のことも、もし言うならば、安楽椅子の上で〔ベルベル語で〕¹⁰⁾ 言うほうがよいと思う。だが、イト、君は読むことが出来ないのだ。私は手紙を引き裂いた。そして、そのほうがいいのだ。

クロードへの手紙のあとで、私は新聞をとりあげた。月日の経過を見出し、我々みんな

が暮しているこの地獄から離れて、人々が森や舞踏会や工場や、あるいは街角の食料品店に行くのを知ろうとしたのである。無駄なことであった！ 私の新聞のどの頁にも、この世のどの空の下にも、悲劇の花はひとりでに咲いていた。言葉を弄する必要などなかった。現実には言葉をこんなにも遥かに超えていたのである…… (404-5 頁)

ひたすら受動的に事件に巻き込まれていく過程で、優柔不断なバシールは少しずつ何かに目覚めてゆく。最終的に彼が選び取るのは、現実から眼を背けることでもなく、革命の理念に自己を同一化させることでもなく、ただ言葉を遥かに越えた「現実」を、その悲劇的な挫折を徹底的におのがものとして受け止めることであり、その猛烈な責任敢取の念がここに表白されているのである。

言葉のまやかし、諺の真実

フェッラーガ、いやムジャーヒド（聖戦の戦士）たちの武勲を新生国家の礎に置くアルジェリアにあって、マムリが独立戦争を英雄譚ではなく悲劇として描いたことの意味は重い。しかも彼は、さんざん言葉を尽くした長篇小説の最後に至って言葉の限界を語るのである。新聞に書かれたフランス語、クロードへの手紙に書いたフランス語——書かれた言葉は現実からも、書き手の意図からも乖離していく。代書人の解釈が加えられ、スキャンダルめいた憶測を呼ぶことを想像し、バシールはイトへの手紙を、書かれた言葉を引き裂き、むしろベルベル語で、話し言葉で語りかけたいと願う。ここには、書かれ得ぬ言葉としてのベルベル語、他者の言葉であるフランス語に対する憾みがあるのは当然としても、遥かに言葉そのものの不全性が問題とされているように思われる。言の尽くし得ぬ余白としての現実を、言葉の不完全性の彼方に想うことが要請されているのである。

実は、そこまで根源的ではない位相でならば、言葉と現実の乖離は、言説のまやかしとして幾度となく批判されている。その代表が新聞の言葉であろう。「アルジェの新聞も、ラジオも、組織暴行の企業なんだ」(11 頁)とバシールは言う。続けてラムダンが演説をぶつ。

人間と一緒に暮すようになって以来、人間はいつも敵対的に規定される二つのグループに分けられて来た。少数の命令する者たちと、群をなす多数の支配される者たちと。前者は、後者を扱うのに、二つの方法しか知らない。嘘か、でなければ暴力というわけさ。我々に対して、フランス人たちはまず惹き付けることを試みた……我々をものにするために、彼らはあらゆる魅惑を繰り広げた。我らの新聞で、ラジオで、公式の演説で、彼らは幾度も繰り返した。我々は愛されているのだ、と。(12 頁)

「真実」を離れて自己増殖していく言葉の「嘘」、その「阿片」が見せるまやかしを受入れるのでなければ、「暴力」すなわち「鞭」が振るわれるのである。クロードの妊娠によって、生まれてくる子がフランスとアルジェリアのどちらにも属さない「世界の中の私生児」(18 頁)となることを恐れ、バシールはクロードを縊り殺すことを妄想するが、すぐさま自分が新聞の言葉

に絡め取られてしまうだろうことをくっきりと想像する。

彼にはいまから、翌朝の〈アルジェのこだま〉や〈暁〉が見えた。北アフリカの一医師の恐るべき犯罪、被害者は友人、ロワイヨール家のクロード・エスピタリエ夫人！そしてへんに凝った小さな記事。《濁った古い血から来た隔世遺伝が突如、パリ医科大学出身ラズラク医師の心に逆流したのでは！ 疑いもなく……血への嗜好が……》ああ！ いやいや、もうたくさんだ、こんなものは！ 〈こだま〉の読者たちの憤激ぶりは充分すぎるほど豊富なのだ。恐怖や愚かさや侮蔑が、彼らの想像の世界やその夜々をありあまる幻想で一杯にしている。口実に事欠かない彼らに、もうひとつおまけに、餌を、理由を、与えるようなことがあってはならない……（17頁）

しかもマムリは、このような言葉による真実の隠蔽、阿片と鞭が、植民地体制が崩壊した後にも存続することを、独立直後のモロッコに舞台を移すことによって示唆している。

彼ら〔バシールとイト〕は公園に行って、〔買物〕全部を選びわけて、整理した。すぐわきのベンチでは長上衣を来て、白い眼をした、鑷のような顔の修行僧が、一枚の新聞を手を持って、勿体らしく読んでいた。彼はうたい上げながら、新聞を下に置いて、威容を整えると、自分を物珍しげに見守る人たちの方に身をむけた。〔中略〕《モロッコ人であろうと外国人であろうと、まだこの国に植民地主義のヒドラを送り込むことが出来るなどと思う者がいるとしても、王が、彼こそは我が独立の最高の守護者であるからだが、そして政府が、法的機関、警察及び軍隊をもって、彼らの忌まわしい野望の遂行を防遏するだろう。植民地主義者の檻の中であまりにも苦しみ、貴重な独立をその血で購った民衆は、必要とあれば、何とでもして、犯罪者たちの罪に対して正当な罰を課すべく、自ら立ち上がるだろう》（250頁）

真実に固執するイトはこの新聞が25フランだと聞き、「嘘の値段には、それでも高すぎるわ」（251頁）と口にして人々の悪罵を受ける。そもそも彼女は、イスティクラール党の独裁に反抗して投獄された「アディ＝ウ＝ビヒ」の裁判のために、バシールに無理やり同行するのである。「ラジオは反逆者だって言ってるわ。私は、反逆者というものがどんなふうに住立て上げられるのか、見てみたいの」（246頁）と言うイトは、やがて叛乱指導者の死刑判決を聞き、泣き声を押し殺してバシールに訴える。

——阿片のあとは、鞭なんだわ！

彼女は、バシールの眼の驚きを読みとった。

——あんたの国の諺じゃないの。

——そうだよ、だが、それがここでどうだというんだい？

——新聞が阿片を、そのあとで裁判が鞭を、ってわけよ。あんたの国でもそうじゃないの？

——そんなことがどうしてわかる？ まだ私たちの国は私たちのものになっちゃいないん

だ。(260頁)

「あなたの国でもそうじゃないの？」という台詞は、ほとんど予言的に響く。ともかく「阿片と鞭」というタイトルが諺に由来していることがここで明らかにされる。諺は、詩や民話とともにベルベルの言語文化を伝える重要な資源であり、独立後にアルジェ大学教授としてベルベル語文化の研究に半生を捧げたマムリにとって¹¹⁾、フランス語にベルベル語の痕跡を刻み込む手段であり、またその凝縮された形式によって言外の含意を、言い得ぬものとしての現実の名残を、テキストに留める方途だったのではあるまいか。

もう一つ例を拾ってみよう。以下はフェッラーガのアクリが手榴弾で負傷した腕を斬り落とした場面だが、異例にもベルベル語（より正確にはその一派のカビール語）の文章がそのまま書き込まれている。

彼は蔭の斜面を谷にむかって、降りて行った。このあたりは、樹が最もよく繁茂しているところである。彼は大量の血を失った上に、腕の痛みが募った。まだ、腕があるかのようにあった。とりわけ、ひどく咽喉が乾いた。まだ、空気は冷たいのに。彼は、よく聞いた言葉を思い出した。《ブ・ルサス・イツナディ・フ・アマン》(銃弾を受けたものは、水を欲しがる)¹²⁾ その理由がのみこめた。彼は、高熱で焼けるようになっていたのである。(147頁)

極限状態におかれたアクリは、このテキストにおいて、革命の大義などではなく諺が喚起するベルベル語の共同体へと結びつけられる¹³⁾。そしてこの諺は、極めて単純な生の真理を告げているだけであり、いかなる立場から発せられたものでもない、その発話の非人称性において、バシールの求める真実へと近づくのではないか。

ベルベル語のエートス

ベルベル語で書かれた文章はもう一つある。モロッコのベルベル人たちにバシールが会う場面で、イトが「メイ・ターニト？（[ご機嫌] 如何?）」と言う。ただの挨拶言葉でそれ自体に深い意味はない。だが、モロッコでのエピソードは、国境を越えたベルベル語共同体の存在を過剰なほどに強調する（実際にはベルベル語にはいくつもの種類が有り、この小説で描かれるほど自在に相通じるものではないはずである）¹⁴⁾。そもそも『阿片と鞭』では、他のアルジェリア小説と比べても例外的なほどに、言語の切り替わりが丹念に明示されている。フランス語が話せる、あるいはベルベル語が通じる、という話題が一再ならず持ち上がり、台詞が何語だったということまで時には説明されるのである。

イトはフランス語もアラビア語もほとんど解さず（少なくともバシールはそう思っている）、ただベルベル語を十全に生きている娘として現れる。短い旅の終わりに彼女は、バシールの進む道のゆくえを尋ねるが、「わからないね、ただ私はそうしなければならないんだ、しかし……」「それはほんとうに行き着けないかもしれない……」と彼は言う。すると、イトは「先生（*maitre*）から聞いた話を口にする。

——どこへもたどりつかない道、先生が昔言ったわ、それは詩というものだ、物事から逃げ出すやりかただ、なぜかといえば、物事というものは、先生は付け加えて言ったわ、ほとんどいつも散文でできている、しばしば俗悪なものだ。先生は私を道のところに連れて行って言ったわ、しかし道のおわりはどこかに通じているのだから。先生の道は、どこに通じていたのかしら？

彼女は、暗黒の中に真理を、あるいはそれを与える言葉を探すかのように、見つめた。〔後略〕（265頁）

そして、アルジェリア戦争の過酷な現実から離脱したモロッコでのひとときを、バシールは「バカンス」と呼ぶ。「しかし、それは我々が島にいたからなんだ、バカンスだったからだ。もう夏が終わったんだから、我々は二人とも島を離れて、広い陸地に、秋の嵐の中に、道の砂利に、労働の日々に、その散文の中に戻っていくんだ」（266頁）と彼は言う。かりそめの夢のようなこの時空は、アディ＝ウ＝ビヒの裁判が示すように「阿片と鞭」の軛をまぬかれていないものの、イトの口から発せられるような自由な言葉が生きている世界であり、そこに仮託されたアルジェリアの未来への希望を見出すことができよう（ベルベル語に限って言えば、独立政府の弾圧によってその使用が厳しく制限されることになるのだが）。

一方、タラの村においては、ベルベル語は人々の誇りや男らしさという美德に結び付いている。例えば、パリに出稼ぎに行き、貧困にすりつぶされて失踪したベライドは、自分を探しに来た息子に対して「男」であることを拒否する。「ほかのものを放ったらかして、ひとりだけ逃げ出すなんて、まちがってるし、卑怯だし、簡単すぎるからねえ。いいかい……ひとりだけなら、何だって簡単なさ！……だが、男なら——婆さん〔自分の妻のこと〕はそこでアルガズといただろう、そんなことは俺だって知っているさ。アルガズ、つまり男だ……」（90頁）という彼が、argaz というベルベル語にこめられた男の責任を背負いかねるとうそぶく様子は悲痛ですらある。また、タラの村会において父祖たちの「誇り」が失われていることに驚愕したバシールが思いを致すのもベルベル語に対してである。

何世紀もの昔から、一度だって、タラはこんな集会を持ったことはなかった。それはまちがいが無い。漫画や忌まわしい仮面舞踏会より、もっとひどい！ 往年の集会では、バシールはいまでもよく覚えているが、タイエブのようなつまらぬ男や、アムールのような悪党が、ちょっとでも口をひらくなんてことは、絶対になかった。いまや、彼らは討論の先頭に立っている、というよりも、彼らだけでしゃべっている。往年の集会では、美しい比喩や人間らしい言葉が聞かれたものだった。そこでは言葉が大切にされた。人々は人間を大切にしていたからである。いまや、アムールやタイエブが公然と恥知らずに、ベルベル語を台無しにしていた。ちょうど彼らが人間の心や……身体を台無しにするのと同じように、その同じ卑劣さによって！（102頁）

しかし、そのタイエブがフランス軍との連絡役として権力を握ることになったのは、人々が、ベルベル語の諺が要求する品位を自らが保つために、つまはじきものの彼に「恥の雨」を押し

付けたからだった。なぜなら「私たちの国では、品位の感情をすべて失った者に対して、彼が歩くとき、恥の雨が降る、と言う。誰も、そんな雨を望まなかった」(106頁)のだから。ベルベル語に結び付いた「誇り」や人間らしさから排除されたタイエブは、ゆえに自らの存在をフランス語化させてゆく。

はじめ、人々は今までのように彼を笑いものにして、馬鹿にしようと試みた。というよりも、彼の中に昔の道化を呼び起こして、彼らが授けたあやしげな権力のお祓いをしようとしたのだ。しかし、人々はすぐにこのゲームをあきらめた。《大尉どのは仰言っているよ……》気違いでもなければ、誰も抗弁できない権威によって、強力なこの言葉のかげに、ちょうど要塞にかくれるように、立てこもって、タイエブは日毎に大きくなっていった。昔は壁にくっついて歩いたが、いまや彼は堂々と道の真中を歩き、ブルヌースを肩から脱げそうなほどに着て、決して笑い顔をしなくなった。声さえ変わって、それとなく、ベルベル語の中に、フランス人たちの言葉のそっけなく、きっぱりとして、それでいて粘つくような調子をまじえるようになった。最も心弱い者たちは、彼にちょっとした贈りものをするようになった。[中略] やがて、タイエブはわざわざ SAS [特別行政本部] まで出掛けていく労をさえ、省くようになった。長年にわたって、彼に侮蔑の味を味わわせて来た人々にむかって、毎朝新しい規則を發布するのは、いまや彼自身であった。(108頁)

終いには「彼はフランス語で大きな声をあげ」るようになる、「蛆虫は殺せ！」(109頁)と。タラは、いわば「恥」への生贄に差し出したタイエブによって自らを蝕まれ、ベルベル語とともに貶められていた。それだからこそ、ついにすべてが破壊されることになる前夜、村会にひとときの「誇り」が取り戻されるのもベルベル語の力に拠らねばならないのだ。

——部隊は、ベライドは考える、すっかりみな殺しの用意が出来ているぞ。

——タラのみなさん、みんながここに集まっているところで……

モハンド・サイドの声が、いっばいにひろがったざわめきを抑えた。みんなが顔をそのほうに向けた。モハンド・サイドが集会にむかって話し出した！ それは事件だった！ 彼がフランスから戻って来て以来、いまだかつてそんなことをしたことは、ないのだ。

——タラのみなさんよ、みんながここに集まっているところで、私はお別れを言いたい。私は明日旅に出るのだ。ひとが旅に発つとき、それがどのくらいかかるか、誰がわかるだろうか？

会衆はすべて驚愕した。モハンドが話そうとするのは、みんなが心配している事ではなくて、自分にしか関係のない事柄なのだ。[中略]

若者の皮肉な声が訊ねた。

——あんたなしで、この村はどうなるのかな？

——それが何だね？ モハンドが言う、村が生きていくならば！ あんたたち若ものは、この村がひとりでに生まれたとか、一晩のうちに生まれたとか、あるいは、石で出来ているから、それと同じくらい長続きするとか、思っている。あんたたちはまちがっているぞ、

軽はずみな子どもたちよ！ この村が作られるには何世紀もかかっているのだ。何年も何年も手探りをし、それが消えてしまわないために、時にはすべての筋肉を緊張させ、時にはすべての精神をとぎすまし、すべての心の熱気をそそいだにちがいない。あんたたちはまだ若すぎて、この石どもの生命とその崩壊とのあいだには、糸一本のちがいきかないということが、わからんのだ……

老人たちは、モハンドがこの別れのために、えらびぬいたベルベル語を使っていることに、気づいた。それは、特別の日のために、彼がいつもはひかえていたものだ。老人たちは不安になった。ただそれは、別れの挨拶のためだけなのだろうか？ 若ものたちはよくわからなかったが、ただ漠然と、事態が重大なので、モハンドは、それに応じた言葉をえらんでいるのだ、と感じていた。(362-3 頁)

翌朝、フランス軍に狩り出されたアリとアクリは処刑され、タラは砲撃によって破壊されることとなる。与えられた一時間の猶予のうちに村人たちが避難するなか、しかしモハンドは独りモスクに残って村とともに死なんとする。その場に行き当たったのが、タラが無人となったか確認を命じられたタイエブなのだが、彼は一転して最後の赦しをモハンドに乞う。

——ダ・モハンド、俺たちをあそこから（彼は寺院を指した）見まもるお方にかけて、おめえが餓鬼のときにおめえが吸ったおっぺえにかけて、もうすぐおめえの行く天国にかけて、おめえのおふくろにかけて、神が授けたおめえの一人息子にかけて、それから神、全人類のただひとりの神、忠実な者（彼はモハンドを指した）の神、裏切者（彼は人差指で自分自身の胸を指した）の神にかけて、おめえの死の前に、俺の死の前に、おしめえの赦しを与え給え。(398 頁)

誓約文を畳み掛けることによって、すなわち特定の言語の修辞におのが魂の救いを賭けることによって、タイエブはベルベル語の伝統へと回帰する。しかし、心ここにあらざるモハンドに赦しを拒絶され、タイエブは逆にこう宣言する。

——お別れだ、きょうでえモハンド！ 俺はおめえを赦す。タラのみんが俺にした悪事を、無理矢理俺にくわせた侮辱を、赦してやる。あばよ、きょうでえ！ (399 頁)

金石範は、このタイエブの最後の「回心」を語り、「ここには民衆の姿、生活がある。裏切り、裏切られながら一つの共同体を維持して行こうとする民衆の全体の底に流れる生活への意志がある」(419 頁) といみじくも指摘する。そしてこの共同体とは、「忠実な者」も「裏切者」もともに包含する共時的な広がりであるのみならず、モハンドが訴えたように「何世紀もかかって」作り上げられた通時的な奥行きをもっているものであり、その成員の共有するエートスを担保するものが正にベルベル語だったのではないだろうか。その意味では、この小説にとってフランスの植民地主義などほとんど天災のような外部にすぎず、真に物語を動かしているのはアルジェリア人同士の、更に言えばベルベル人同士の思想と情念のドラマなのである。

おわりに

『阿片と鞭』のなかで話されている言語は、ベルベル語（特にカビール語）、アラビア語（アルジェリア方言）、フランス語の三種であるが、これがフランス語小説である以上、わずかに取り混ぜたベルベル語の単語を除いて、すべての会話がフランス語に「翻訳」されている。すなわち、小説というものが原則的に一つの言語でしか書かれ得ない以上、ベルベル語という音声言語はフランス語という書記言語のなかに転移してゆかねばならないのである。その際に、現実のベルベル語が内包する無数の偏差——個人的あるいは地域的な差異は、書かれたフランス語の平準化作用によって濾し取られざるを得ない。そこに、金石範が想像する「もどかしさ」があるのだが、同時にそこにこそ、現実世界のどこにも存在しないベルベル語のアイデアが現出するのではないか。

ベルベル語を生きる者たちの生の真実はベルベル語によってしか生きられることができないにもかかわらず、それはベルベル語によって、言葉によって語り得ぬものである（「現実という言葉はこんなにも遥かに超えていた」）。そもそも「選び抜かれたベルベル語」（le berbère recherché）の高貴さというものは、どれそのベルベル語の語彙に内在するのではなく、「ことば」を選び抜くという行為そのものに存するのであり、畢竟いかなるアイデンティティを「ことば」に認め、自らのアイデンティティとして引き受けるのかにかかっている。そして、フランス語のなかに仮構されることによって、『阿片と鞭』におけるベルベル語は一つの思想へ、生に対する態度へと昇華されるのであり、ベルベロフォニー（ベルベル語を話すこと）は一つのユマニズムへと結びつく。それゆえ、ベルベル語という極めて特殊な地域言語の問題を語りながらも、その言語共同体は「民衆」一般の生きる世界として普遍化されており、アルジェリアやマグレブといった個別の文脈を離れて了解可能なものとなる。

タラ＝ウズルーの村は、植民地支配という災厄をきっかけにしつつも、タイエブのような自らが孕んだ異胎によって共同体を自壊せしめる。その敗北を、自らが引き起こしたものとして、フランス語に引き受けること——もっと言えば、フランス語に移し替えられたベルベル語に引き受けることは、日常的な言葉の実践を越えたところで、おのれの「ことば」のアイデンティティを、その傷とともに生きることなのである。多くの作家たちが祖国アルジェリアを創作の主題とするなか、ムールード・マムリはほとんど超然として、人間にとっての「ことば」の問題を探求していたように思われてならない。

注

- 1) アルジェリア文学の概要に関しては以下の拙稿を参照されたい。「アラブ・フランコフォニーと越境の文学：アルジェリア、レバノン、エジプト」土屋勝彦編『反響する文学』名古屋市立大学研究叢書、風媒社、2011年、19-59頁。
- 2) エマニュエル・ロプレス「日本 その人と風土」『新潮』第54巻第11号、昭和32年11月号。
- 3) Cf. 竹内泰宏『アジア・アフリカの文学と心』第三文明社、レグルス文庫、1980年。
- 4) Raymond Francis, « Opium and the Stick by Mouloud Mammeri », translated by Maissa Talaat, in *Lotus: Afro-Asian Writings, Quarterly Review of the Permanent Bureau of Afro-Asian Writers*, Vol. I Issue No. 4, January 1970, p. 212-214.

- 5) 遠藤周作『フランスの大学生』[早川書房, 1953年] 新風舎文庫, 2005年, 66頁。
- 6) 原題は『脱走兵』。70頁もの解説を付けている編訳者の淡は、1925年に京大学生事件で検挙、三一五事件に連座して35年にフランスに亡命。48年に帰国後、日本アジア・アフリカ協会常任理事、日本北アフリカ協会事務局長を務め、72年には大著『アルジェリア革命：解放の歴史』（刀江書院）を執筆出版する。
- 7) 『ジャン・ミュレールの記録』（『キリスト者の証言』誌, 1957年）と『フランス応召兵の証言』（「精神的抵抗委員会」刊行, 1957年）の合本。戯曲化されて俳優座で上演された旨、大江健三郎『沖繩ノート』（岩波新書, 1970年）にも言及がある。
- 8) Cf. 鈴木道彦『越境の時：一九六〇年代と在日』集英社新書, 2007年。
- 9) 金石範「裏切者タイエブのことなど」, ムールード・マムリ『阿片と鞭』[Mouloud Mammeri, *L'opium et le bâton*, Paris, Librairie Plon, 1965] 菊池章一訳, 河出書房新社, 1978年, 413-420頁。以下、本書からの引用は本文中に頁数を指示する。
- 10) 筆者が参照した現行のポワン叢書版 (Mouloud Mammeri, *L'opium et le bâton*, Paris, Editions La Découverte, 1992) では、「C'est en berbère que j'eusse aimé lui dire cela et d'autres choses encore. » (p. 313) となっており、「安楽椅子」に相当する単語は無い。Plon版との異同は未確認。
- 11) とりわけベルベル語詩の研究に大きな足跡を残し、古詩の収集と翻訳、文法書の執筆など、数多くの業績がある。しかも独立後のアルジェリアでは、分離独立運動を警戒した政府によってベルベル語は長年タブー視されていた。1980年にカビリーで勃発した異議申し立て運動「ベルベルの春」は、マムリのベルベル語詩についての講演が当局に禁止されたのが発端だった。
- 12) 邦訳はベルベル語をルビにして処理しているが、ここでは原文に倣ってベルベル語とその仏訳を別けた。Mouloud Mammeri, *op. cit.*, p. 116: « Bu rsas itsnadi f aman » (L'homme atteint d'une balle cherche l'eau).
- 13) このような解釈は、社会主義時代はもとより現在のアルジェリアにおいても「分離主義」的な危険思想と看做される恐れがある。
- 14) 『阿片と鞭』は1969年に映画化されており、アルジェリア映画史上もっとも重要な作品の一つに数えられる。しかし、全編がアラビア語アルジェリア方言で撮影され、モロッコでのエピソードが削られるなど、ベルベル語の存在は隠蔽されている。また、近年この作品の吹き替えのためにシナリオの会話部分をベルベル語訳したアブデヌール・アブデッセラムは、「アルジェリアのアラビア語で制作されたこの映画のオリジナル・バージョンでは、カビール語の子音からなる主要人物の名前がアラビア語の子音による別の名前に置き換えられた。我々は、小説の作者のムールード・マムリがいかにそのことに悲しんだか知っている。それゆえ私は、この翻訳では、小説のもともとの内容のように名前を復元しようと試みた。つまり「アッバース」ではなくアミル・シュ大佐に、「ブーゲルブ」ではなくアクリにしたのである」と述べている (Abdenour Abdesselam, *Dialogues en berbère pour le doublage du film « L'opium et le bâton »*)。なおこの小著は出版社・発行年はともに不明でISBNの記載も無いが、2001年の「黒い春」で犠牲になったカビールの若者に捧げられているため同年以降の印刷物だと思われる。

